

農事組合法人室岡営農組合（矢巾町）

経営概要：構成員76戸、稲作50ha、大豆25ha、味噌加工
[6次産業化総合化事業計画について]

テーマ：麦、大豆の二毛作立毛間播種技術で生産した大豆の加工による経営改善と地域活性化

事業概要：生産した大豆を自前の施設、機械で乾燥するとともに、大豆加工業者への直接販売、安全・安心な地産地消味噌の製造、販売を行うことにより、大豆の付加価値向上と雇用拡大、ひいては経営の多角化、高度化、経営の改善を図り、地域活性化に寄与する。



①取組の経緯

- 昭和47年の第二次農業構造改善事業を契機に設立した生産組合と、平成13年の転作団地化で設立した転作組合が合併し、平成15年に結成、平成17年1月に法人化した。
- 東北農業研究センターの指導により、平成18年から、麦・大豆の二毛作立毛間播種技術を導入・実施し、大豆210kg/10aの生産実績あり。
- 大豆の乾燥・調製を町外施設に依存していたので、味噌加工が自家消費にとどまり、収益確保もきびしく、補助金依存体質から抜け出せないでいた。
- 自前の施設・機械で大豆を乾燥・調製し、大豆加工業者へ直接販売、安全・安心な地産地消味噌の製造、販売を行うことで、大豆の付加価値向上、雇用拡大、ひいては経営の多角化、高度化、経営の改善を図り、地域活性化に寄与する6次産業化総合化計画を策定し、平成25年2月に認定を受けた。

②課題

- 6次産業化の推進にあたり、販路拡大と、より一層の地産地消を推進すること。
- 自家消費にとどまっていた味噌の販売。

③課題解決の方法

- 自ら訪問セールスを行い、販路拡大を行った。
- 町にかけあい、地産地消の一環として、地元の味噌を子どもたちに食べてもらえるよう、給食納入の交渉を行った。

④取組の効果

- 生産した大豆（品種：シュウリュウ）で味噌加工に取り組み、町内の小、中学校の給食センター（2,500食）と盛岡市の食堂に定期的に納入、販売することが出来た。

⑤取組のポイント

- 町や組合員との協力・理解の醸成
→組合員の協力と地産地消に対する町行政の理解が大きく影響する。
- 自らの積極的なセールス
→自分の足で訪問セールスを行い、取引先を増やすことに成功。

